Quirk et al.(1985)のzero articleとzero plural*

葛 西 清 蔵

[0] Quirk et al.(1985)は、go to school, play *guitar*をzero articleとし、shoot *duck*, hunt *lion*をzero pluralとするが、zero articleもzero pluralも「裸の名詞」とみることができるという点で同じものではないかと主張をするのが本稿の目的である。

[1] Quirk et al.(1985)はUses of zero articleとして、大きく6の項目 (1)the zero article with unstressed *some* (2)the zero article with definite meaning (3)noun phrase in a copular relation (4)noun phrases with sporadic reference (5)parallel structure (6)fixed phrases involving prepositions があり、そこには、たとえば大きい項目の、(4)のnoun phrase with sporadic referenceに、さらに小さく(a)some 'Institutions' of human life and society: go to *town, bed, hospital, prison, school*. (b)means of transport and communication: travel, come by *bicycle, bus* (c)time of day and night: at *dawn*, when *day* breaks (d)seasons: (The)*winter* is coming. (e)meals: Where are we having *dinner* tonight? という項目わけと例文がある。
ここにあげられている例には共通に「冠詞がない」という性質があるにもかかわらず、それの説明がない。これでは「冠詞のない用例集」であって、文法とはいいにくいのではないか、という疑問がおこる。さらに上で見たそれぞれについて、例えば(4)(d)にはThe *winter* of 1963 was an exciting time. (4)(e)には*The dinner* after the retirement party was quite lavishなどのように冠詞のつく例も併記してあるが、これら冠詞のある例についての説明もない。

[2] まずこれら「冠詞がzero」の場合に共通にみられる理由はなんであるかをさぐっていくことにしたい。つぎの例をみよう。

1. If *Winter* comes, can *Spring* be far behind?

*OPD*が定義するようにwinter: the coldest season of the year. spring: the season after winterであろう。これはQuirk et al.(1985)のいう(4)(d)のseasonsのzero冠詞ということになるであろうが、しかしこのzero冠詞は、ほかのzero冠詞の例といったいどんな共通点をもっているのであろうか。つぎの例をみよう。

2 a. go to church
b. go to school

これはQuirk et al.では(4)(a)の'institution'ということになるであろうがchurchを辞書でみると、つぎのようになっている。

3 a. a building where Christians go to worship (*Longman*)
b. a building for a public,esp.Chrstian,worship(*Penguin*)
c. a building in which Christians worship(*COBUILD*)

こうして見ると、三つの定義の共通部分<building><Christians><worship>の集合、つまり概念的意味とこれに「冠詞がつかないこと」に関係かおるのではないか、と予想を立てることができる。ためしにschoolをみるとan institution for educating children or for giving instruction(*OPD*)とあり、まさしく「子供の教育」の目的にそったときにはzero冠詞となるのではないか。つまり、churchでいうと、<building><Christians><worship>にそったつかわれ方のときに無冠詞となるのではないか。ここから、

4．定義のような意味でつかわれるとき冠詞はつかない

という予想を一応たてることができる。概念的な意味では、具体性よりも、むしろ当然のことながら(他のものではなくて)「～という概念的な意味をもつもの」ということになる。ここでは抽象的な意味であり具体性はない。さきほどのschoolでいえば、ほかのものではなく、「子供が教育をうけるところ」ということであろう。であるからこそ、go *to school*, go *to bed*は、ほかではなく「子供が教育を受けに行く」、「寝に行く」となり。別の目的のときにはgo to *the school*, go to *the bed*と冠詞がつく。このzero冠詞を考えると、

5 a. Is there *water* on the moon?
b. This engine does't use *petrol*.

の例において、(5a)では、「月には水というものがあるのだろうか」で冠詞がないし、つぎの「このエンジはpetrolというものはつかわない」もzero冠詞である。Swan(1995：62)では'the interest is in the type, not in the amount'という言い方をしている。ここでもやはり、「ほかならぬpetrolというタイプのもの」ということになろう。ここまでの議論をまとめると、

6．概念的な意味で、タイプを問題にする時には冠詞はつかない、

ということになりそうである。

*OED*によると、

type: <linguistics>an abstract category or class of linguistic item or unit, as distinct from actual coocurrence in speech or writing. Contrasted with TOKEN.

とある。我々のいままでの主張は、ここに含まれていると思われる。さらに token をみると

token: <linguistics>an individual occurrence of a linguistic unit in speech or writing.Contrasted with TYPE.

とある。ここではじめて名詞はindividual occurrenceと具体性をもちはじめる。つまり数える対象となる。type として使われているときにはabstruct categoryであり、具体的、個別的ではないので数える対象とはなれないのではないか。つぎの例はどうであろうか。

7. a You play the *guitar*, I see.
   b …the night spot where John played *guitar*
   c He plays *piano* in Glenn Miller's band.

(7a)のthe guitar は、特定の guitar であろうからよいとして、(7b)のguitar,(7c)のpianoになにもつかないのはなぜであろうか。Swan (1995 : 516,710)は、音楽家の仲間では、よくtheを落とすことがある、という。音楽家の中では、なにか楽器を弾くのはむしろ当然で、関心はむしろ、どの楽器が弾けるかであるはずである。ほかの楽器ではなくて「～という楽器」というように、まさに楽器の type が問題のはずである。guitar, piano が zero 冠詞なのはまさしくこの理由からであると推測できる。これまでの議論からいえることは。

8. 名詞には、その概念的な意味での、つまりtypeとしての使い方があり、その時には冠詞がつかないのではないか、

ということである。これが典型的にみられるのはface to faceやhand in hand(はじめにあげたQuirk et al.(1985)の分類の(5),(6))などであろう。(またCollins(2005 : 277)が'contrasting'というTen gardeners used to work this land, *winter and summer*. もここにいれていいであろう。)以下では更に検討を続けたい。つぎの例をみよう。

[4] 9 a. Have you ever shot *duck*?
   b. They went to Africa to hunt *lion*.

(8a)のduckは、Quirk et al. (1985 : 307)はduckをzero 複数といい、「動物によくかかわっている人」に使われる複数だという。ここでも関わっているのはその道の専門家である。彼らの関心は、その動物の頭数よりも、何をとったかその種類のはずである。ここでもさきのzero冠詞の場合とおなじく、typeが問題になっていると考えられないであろうか。Quirk et al.(1985 : 275)にzero articleについて'the zero article indicates simply the category of the objects referred to'とあるが、このcategoryとはまさしくa type or a group of things having some features that are the same (Cambridge *International Dic.of Eng.*)でtypeのことである。いまくりかえしつぎの例をみよう。

10. a…the night spot where John played *guitar*(=7b)
    b Have you ever shot *duck*?(=9a)

Quirk et al.(1985)では、(10a)のguitarはzero 冠詞、(10b)のduckはzero複数とするが、これはいづれもほかのものではなく「～という概念的な意味をもつ」、「～というtypeのもの」という意味の使われかたであると考えられる。ここではguitar, duckは単数でも複数でもなく、具体性に欠ける抽象的なものであろう。
さきのguitarなどとおなじく、個別的なtokenよりも、ほかのものではなくて「～という種類のもの」と考えるほうがはるかに自然で、一貫性があるように思える。Mother and childで、motherは特定的でない。これはちょうど「母は強し」において、母は「～君の母」のように具体性のあるものではなく、あくまで<female> <parent>という概念的意味を持つ type としての母であり、抽象的であり具体性はない。したがって、冠詞もなければ、複数もない「裸の名詞」たるmother,「母」となると考えられる。 Quirk et al.(1985)のいうzero article, zero plural はこの「裸の名詞」のことと考えられる。
関連すると思われる次の例はどうであろうか。

11. a. *Child* though he is, he is equal to the task
    b. *apple*-tree

(11a)のchildは学校文法でもよくだされるもので、childが形容詞化されて冠詞がない、とされるものである。しかし、これも形容詞的だとすれば、abstract categoryでしかないのであるからtypeとしての使い方であり、冠詞のないのが当然ということになる。また(11b)のapple は treeを修飾しているものだが「単数でもなければ、複数でもなく、主格でも対格でもない」「文法上の語尾を一切除去した形」(Bradley : 111)とは「裸の名詞」そのものであり、これこそ type としての使用を裏付けていよう。

こうして具体的な例にあたってみると、type の定義にあるabstract categoryは zero 冠詞、 zero 複数よりもはるかに説明力があり、たいするindividual occurrence を意味する tokenとならんで多

くの事実を説明してくれるようである。typeは、zero冠詞、zero複数を説明し、一方tokenは、単数(とその冠詞)、と複数の例を説明してくれるようである。

これまでの議論でいえることは、

12 名詞がtypeとして、つまり、概念的な意味で使われるときには、zero冠詞もzero複数も同じく、冠詞もつかず、複数にもならない「裸の」のかたちがつかわれる、

ということのようである。

＊これは葛西(2007)を大幅に書き換えたものである。

参考文献

Bradley,H. 1927 *The Making of English* 大塚訳『英語の成立』1957 泰文堂

Collins 2005 *Collins COBUILD English Usage* Collins

葛西清蔵 1999「無冠詞考」『言語と文化』50：65-84

葛西清蔵 2007「「蛙」はa frog かfrogs か」『言語と文化』67：1-21

Quirk,R.,Greenbauin,S.,Leech,G.and J.Svartvik.1985 A *Comprehensive Grammar of the English Language* Longman

Swan,M. 1995 *Practical English Usage* (2nd)Oxford Univ.Press